

越山若水

2021.9.16

年1回の健康診断。日頃さほど

健康に留意していないのに、検査結果の数値は気にする。だが喉元過ぎれば忘れてしまうから始末が悪い。検査の中で気の重い一つが胃カメラだろう▼毎年決まってカメラ実施の直前は緊張の極み。なじみの医師の言葉に肩の力が抜け、終了後の脱力感とワンパターンである。その胃カメラが戦後まもなく、世界に先駆け日本で実用化されたことをつい最近知る。吉村昭さんの小説「光る壁画」(新潮文庫)を読んだ▼吉村さんは、南アフリカで外科医から教えられたという。帰国後に早速取材し執筆した。東大の外科医とカメラ会社の技師たちの挑戦劇。胃内を見たいという医師の素朴な願い、敗戦国の日本で世界の誰も果たせなかった夢を実現したいとの技術者の願いが合致する▼開発の当初には管に自転車タイヤチューブ、ワイヤに三味線の弦も候補に挙がった。「胃内写真機」と名付けた試作機は柔軟な管の先端に撮影レンズを付け、手元の操作で電球をフラッシュさせ撮影しワイヤでフィルムを引き上げる仕組み。「世界に誇る腹中カメラ」と1950年の毎日グラフで称賛された▼チームが目指した開発理念「危険がない、患者に苦痛を与えない、胃壁を短時間で撮影、細い管の採用」はファイバースコープに結実している。開発者たちの労苦に感謝、リラックスして検査を受けよう。